

神戸新聞
2021.1.13分

離れ離れでも仕事として成立する場面でのVRの発展を願う。ただ人と人が関わり合い、感じ合える人を育てる場面についてはこの先もアナログであるべきだと思ひ、願ひ続けたい。

真のVR元年 神戸から勝負

仮想現実

サラバ 東京 コロナ後の未来

機能が埋め込まれていて、まるで家族がすぐそばにいるように、だんらんのひとときを楽しむ。神戸市のゲーム会社「モノアイテクノロジ」の本城嘉太郎社長が描くのは、そんな未来だ。

真のVR（仮想現実）元年。2020年はそう呼ばれる。2020年はそう呼ばれる。2020年はそう呼ばれる。

1面から続く
ウィズコロナ、アフターコロナの時代。世界はどう変わっていくのだろうか。例えば、ある日の夕食。単身赴任中の夫は、いつものように1人分の食事を食卓に並べる。傍らに置いてあるメガネをかける。離れて暮らしているはずの家族が目の前に現れる。メガネには拡張現実（AR）の

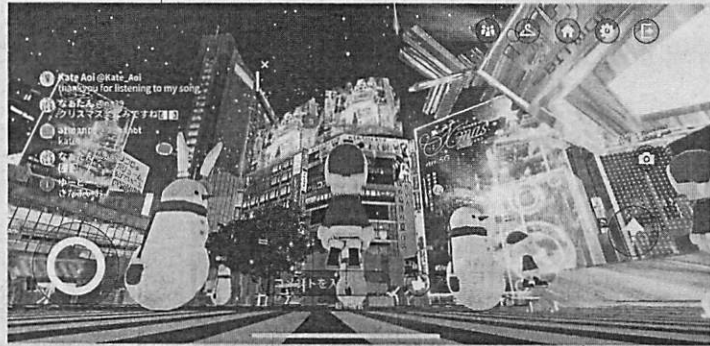


モノアイテクノロジの本城嘉太郎社長

「生まれたまち」に恩返し

技術の蓄積がこれを可能にしている。本城社長の口調に熱がこもる。「今、オンラインなら、ライブチケットも人数に上限があるリアルより3倍売れる。数年先にはスマートフォンがさらに進化して、実写に近い表現ができる。5Gの通信環境も整う。そうなればリアルとバーチャルの境はもっとなくなりますよ」

昨年開催された「バーチャル渋谷」のクリスマスイベント ©KDDI・au 5G/バーチャル渋谷 au 5G X'mas



やオープンキャンパス、展示会などで活用したいという依頼が続々と寄せられている。モノアイ社は17年に本社を東京から神戸に移した。

移転の理由は意外に古風だ。神戸市出身の本城社長が「生まれ育ったまちとながってみたいから」。05年の起業以来、経営は順調だった。結婚して家族を持ち、自宅を埼玉に構えた。でも、なぜか落ち着かない。ある時、気付く。ここでは海が見えないからだ。古里の海と山が強烈に恋しくなった。「せめて登記だけでも神戸に置けば、税金が入って恩返しになるかと思つて」

東京と神戸、ほかの地方。各地をつなぐため、業務は早々にオンライン化した。勤務地の違うメンバーが同じチームで動くこともよくあり、テレワークの全社員導入に抵抗がなかった。経営面でも、地方に拠点

事業拠点を京都や高知、福岡など力所に構える。ゲーム業界の大半が東京に集中するなか、異質な存在感を放つ。

家庭の事情などで地元を離れられない人は多い。転職に抵抗感が少ない東京の人材に比べて「定着率が高い」のだという。

「人も企業もメディアも、全てが集まっている東京には地の利が圧倒的にある。そこで受けた仕事を、環境がよい地方でするのが一番効率がよい」

「淡路島に主な本社機能を移し、4年間で1200人が移住します」
(前川茂之)